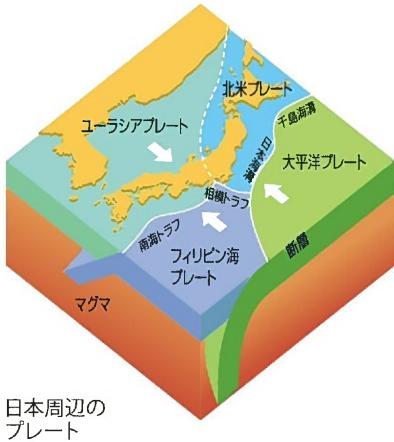




地震の仕組みと岐阜県内の主な活断層

日本列島の周辺は、4つのプレート（板状の堅い地殻）があり、年に数センチの速度で一定の方向に動いています。プレートの境目でのプレート同士の運動が地震を引き起こす原因です。日本では、主に以下の2種類の地震が起こっています。



活断層型地震（内陸直下型）

陸地の地殻もプレートの運動によりいたるところに「ずれ」が生じています。これらのずれはいつかずれ動く可能性があり、「活断層」と言われています。この活断層のずれ動きが地震となります。



海溝型地震

海溝側のプレートのもぐりこみにより大陸側のプレートが引きずりこまれ、境目にひずみがたまり、限界に達すると元に戻ろうとしてはね上がり、地震が発生します。



①海洋プレートが陸の下へ沈み込みます。



②陸のプレートの先端部分がひきずり込まれ、ひずみが蓄積します。



③ひずみが限界に達し、陸のプレートの先端部分がはね上がって海溝型地震が発生します。



岐阜県内の主な活断層

活断層とは、繰り返し地震を起こす可能性のある断層のことです。この活動により内陸型地震が発生します。岐阜県には、内陸型地震の原因となる活断層が分かっているだけでも約100あり、全国で最も活断層が密集している地域の一つといわれています。

活断層調査結果一覧	
*地震調査研究推進本部(文部科学省)	30年以内に地震が発生する確率 (基準日は2008年1月1日)
① 阿寺断層帯(北部)	6.0~11.0%
② 高山・大原断層帯(国府断層帯) 〃 (高山断層帯)	ほぼ0~5.0% 0.7%
③ 恵那山-猿投山断層帯	ほぼ0~2.0%
④ 屏風山断層帯	0.2~0.7%
⑤ 養老-桑名-四日市断層帯	ほぼ0~0.7%
⑥ 跡津川断層帯	ほぼ0%
⑦ 庄川断層帯	ほぼ0%
⑧ 関ヶ原断層帯(南部)	不明
⑨ 根尾谷断層帯	ほぼ0%
⑩ 長良川上流断層帯	不明
⑪ 牛首断層帯	ほぼ0%





南海トラフ

● 岐阜県と海溝型地震

四国から東海にかけての海域では、ほぼ100年から150年に一度、大規模な地震が繰り返し起こっています。1707年の宝永地震(M8.4^(※1))や1854年の安政東海地震(M8.4)、安政南海地震(M8.4)の際には、東海地震・東南海地震・南海地震の震源域で地震が発生し、県南部を中心に大きな被害が発生しました。しかし、その後、1944年の東南海地震(M7.9)、1946年の南海地震(M8.0)の際には、東南海地震・南海地震の震源域でしか発生しておらず、東海地震の震源域に関しては前回の1854年の発生以来、すでに150年以上が経過しており、いつ東海地震が起こってもおかしくない状況にあります。

(※1) マグニチュードは、地震そのもののエネルギーを表し、例えばその数値が0.2ちがうと地震の規模は2倍に、1ちがうと33倍になります。震度は地震による揺れの大きさを表し、その規模、震源からの距離、地盤などの状況により異なります。



● 南海トラフ地震に関連する情報の種類と発表条件

南海トラフ全域を対象として、異常な現象を観測した場合や地震発生の可能性が相対的に高まっていると評価した場合等に、「南海トラフ地震に関連する情報」が気象庁より発表されます。

情報	情報発生条件
臨時	<ul style="list-style-type: none"> ・南海トラフ沿いで異常な現象^(※2)が観測され、その現象が南海トラフ沿いの大規模な地震と関連するかどうか調査を開始した場合、または調査を継続している場合 ・観測された現象を調査した結果、南海トラフ沿いの大規模な地震発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと評価された場合 ・南海トラフ沿いの大規模な地震発生の可能性が相対的に高まった状態ではなくったと評価された場合
定期	<ul style="list-style-type: none"> ・「南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会」の定期会合において評価した調査結果を発表する場合

(※2) 南海トラフ沿いでマグニチュード7.0以上の地震が発生した場合や東海地域に設置されたひずみ計に有意な変化を観測した場合など、気象庁が調査を開始する対象となる現象。

気象庁が調査を開始する対象となる現象

- ・想定震源域内でマグニチュード7.0以上の地震が発生
- ・想定震源域内でマグニチュード6.0以上の(或いは震度5弱以上を観測した)地震が発生し、ひずみ計で当該地震に対応するステップ状の変化以外の特異な変化を観測
- ・1ヶ所以上のひずみ計で有意な変化を観測し、同時に他の複数の観測点でもそれに関係すると思われる変化を観測している等、ひずみ計で南海トラフ沿いの大規模地震との関連性の検討が必要と認められる変化を観測
- ・その他、想定震源域内のプレート境界の固着状況の変化を示す可能性のある現象が観測された等、南海トラフ沿いの大規模地震との関連性の検討が必要と認められる現象を観測

※本情報を発表していくなくても、南海トラフ沿いの大規模地震が発生することもあります。※この基準は平成31年3月時点のもので変更される可能性があります。



瑞穂市の地震の被害予測



瑞穂市における地震による被害想定

瑞穂市に影響を及ぼすと現在考えられる地震は5種類（南海トラフ地震、養老-桑名-四日市断層帯地震、阿寺断層系地震、跡津川断層地震、高山・大原断層帯地震）あり、それぞれが発生した場合について、岐阜県が平成24年に推定した被害想定は以下のとおりです。

想定される地震	震度階の最大値	建物被害(全壊)	建物被害(半壊)	死者 (推定最大)	負傷者 (推定最大)	重症者 (推定最大)	要救出者 (推定最大)	避難者数	帰宅困難者数
南海トラフ	6弱	1,059棟	2,380棟	13人	252人	23人	67人	5,905人	259人
養老-桑名-四日市断層帯地震	6強	2,434棟	3,766棟	98人	782人	173人	513人	11,399人	—
阿寺断層系地震	5強	59棟	166棟	0人	15人	0人	0人	367人	—
跡津川断層地震	5強	162棟	434棟	0人	40人	1人	3人	989人	—
高山・大原断層帯地震	5強	110棟	277棟	0人	21人	0人	0人	646人	—

平成23～24年度岐阜県南海トラフの巨大地震等被害想定調査



南海トラフ巨大地震発生時に予測される震度分布



震度6弱

固定していない重い家具の多くが移動、転倒する。

地震は突然起るので、日常からの備えがどれだけできているかが大切です。防災読本に掲載されている地震対策等を参考にし、地震に備えるとともに、避難所などを事前に確認して地震発生後に適切な行動をとれるようにしましょう。



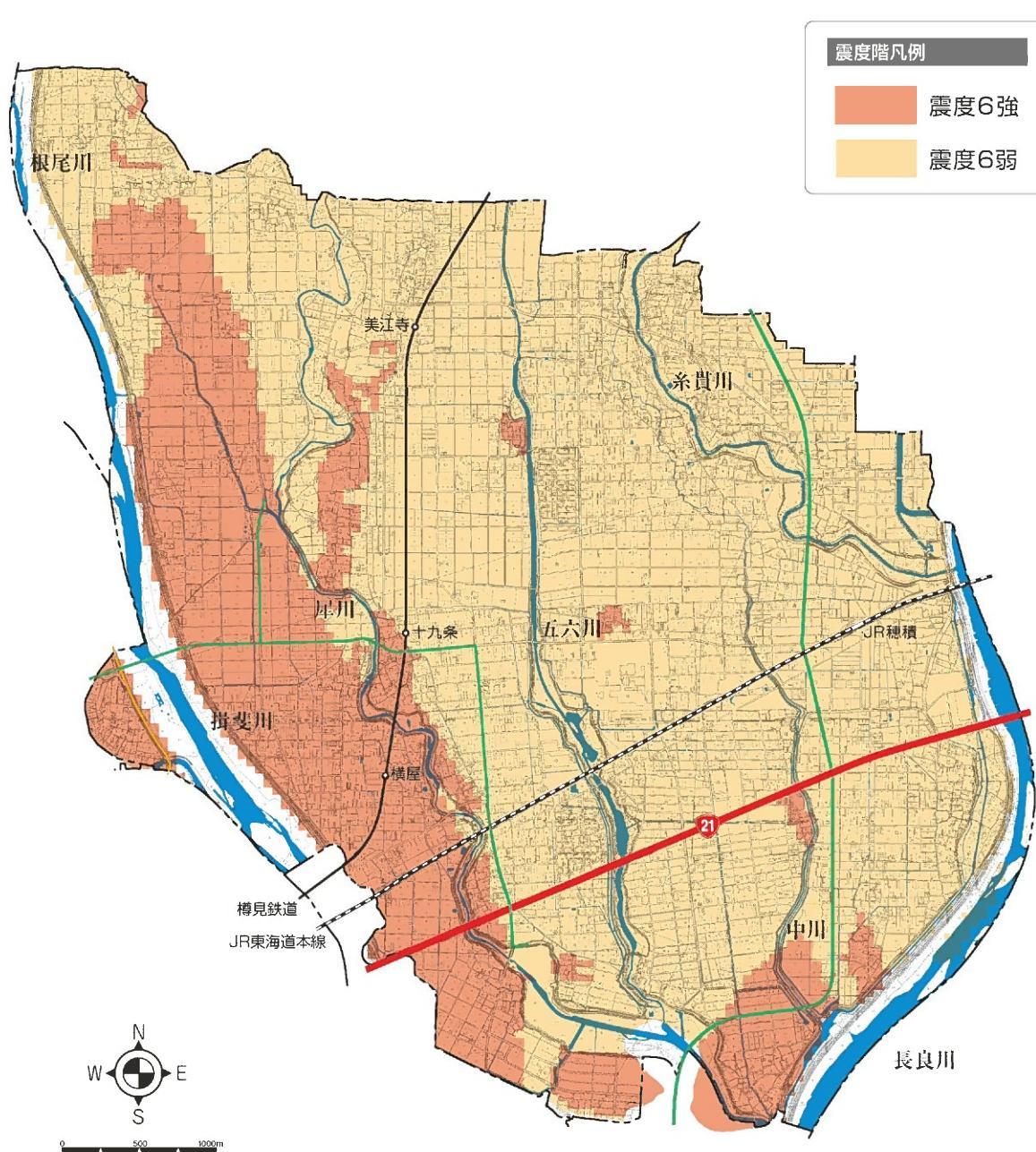
瑞穂市で予想される地震



地域の揺れやすさマップ（予想震度）

この「地域の揺れやすさマップ」は、瑞穂市で予想される地震の中で一番大きな影響があると予想される養老・桑名・四日市断層による内陸型地震が発生した場合の、市内での予想震度の分布を50mのメッシュごとに表したものです。

震度の算出にあたっては、震源断層からの距離、地域の地盤の状況を考慮して算出していますが、地震の規模や震源からの距離が同じであっても、地盤の違いによって揺れは異なります。このマップにおいては、想定した地震の震源が市の西方向にあることから、比較的市の西側部分の揺れが強めに表示されています。





液状化による被害

液状化は、水分をたくさん含んだ砂の地盤で発生する現象です。地震が発生する前は、地面の砂のすき間に水をたくさん含みながらも砂粒同士がくっつきあい支えあって一見硬い地面があるよう見えます。しかし、地震が発生して地盤が強い振動を受けると、今までお互いに接して支え合っていた砂粒は水に浮かび、地面が沼のようになってしまいます。そして、地震がおさまると、砂粒は以前より密になり、その間にあった水は地表に湧き出できます。液状化現象がおこると、その上に立っている建物が沈んでしまったり、地中に埋まっていたマンホールや埋設管が地上へ突出したり、地面全体が低いほうへ流れてしまったりします。平成23年3月11日の東日本大震災においても、東京湾周辺でも被害が発生しました。

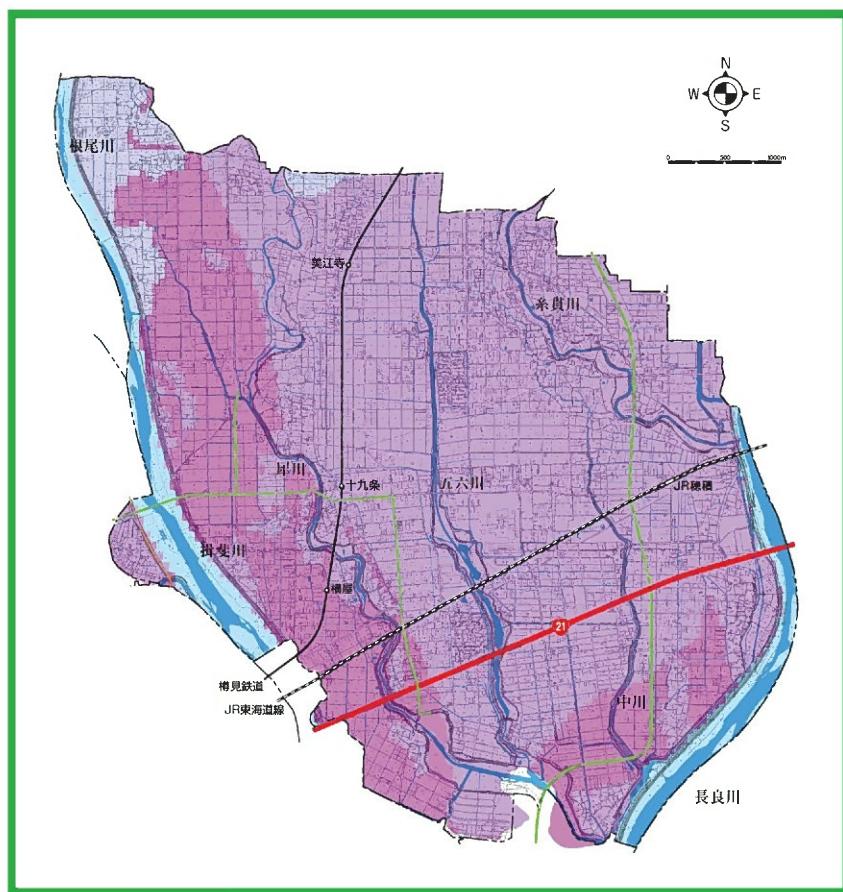


瑞穂市の液状化危険度予測図（過去地震最大モデル）

液状化の危険度は、液状化指数（PL値）という地盤の液状化の程度を表す指標により示されます。PL値は、各土層の液状化強度（せん断応力に対する強度）を深さ方向に重みをつけて足し合わせた値で、このマップにおいてはPL値を基準に、液状化の「危険度が極めて高い（PL値が15より大きい）」「危険度が高い（PL値が5より大きく15以下）」「危険度は低い（PL値が0より大きく5以下）」「危険度はかなり低い（PL値が0）」の4段階に分けて表記しています。

このマップにおいては、想定した地震の震源と地盤の状況から、地域の揺れやすさマップと同様に比較的市の西側部分の液状化危険度が大きくなっています。

液状化凡例	
	危険度が極めて高い (PL > 15)
	危険度が高い (5 < PL ≤ 15)
	危険度は低い (0 < PL ≤ 5)
	危険度はかなり低い (PL = 0)





地震発生時のタイムライン



地震発生時の行動パターン

大きな地震が発生した時、一瞬の判断が生死を分けることがあります。冷静に行動するために、行動パターンを覚えておきましょう。

地震発生

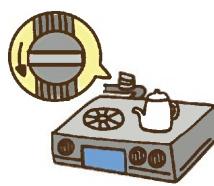
1~2分

- 落ち着いて自分の身を守る。
机の下に隠れるなど、まずは自分の身を守ること。
- 素早く火の始末。
揺れが激しいときは、無理せず大きな揺れがおさまってから火の始末。
- ドアや窓を開けて逃げ道を確保。



3分

- 火元を確認し、出火していたら初期消火。
- 家族の安全を確認。
- 靴を履く(ガラスの破片等から足を守るため)。
- 非常時持出品を手近に用意。



5分

- となり近所の安否確認。
特に一人暮らしの高齢者や、要配慮者がいる家には積極的に声をかける。
- 余震に注意。
大きい揺れがおさまった後に、小さな揺れが起こることが多いので要注意。



5~10分

- 自宅を離れるときは、行き先を書いたメモを目立つ場所に残す。
- さらに出火防止を。
ガスの元栓を閉め、コンセントを抜き、ブレーカーを切る。



10分～
数時間

- 消火・救出活動
近隣住民と協力して消火や救出活動をする。
- ラジオやスマートフォン等で最新の情報を確認。
- 引き続き家屋倒壊等の恐れがあれば避難。



～3日
ぐらい

- 家屋倒壊等の恐れがある場合は避難所で生活を。
- 壊れた家には入らない。
- 生活必需品は個々の備蓄でまかなう。
- 災害情報・被害情報の収集。
- 引き続き余震に注意。



避難生活
では

- 自主防災組織を中心に行動する。
- 集団生活のルールを守る。
- 助け合いの心を忘れずに。





地震が発生した時の行動



屋内にいたら

家の中

- 大きな揺れを感じたら、テーブルの下に隠れ、身を守ることを最優先に。
- 無理をして火を消そうとしない。
- 裸足で歩き回らない(ガラスの破片などでけがをする)。
- 乳幼児や病人、高齢者など要配慮者の安全確保を。



デパート・スーパー

- ショーケースの転倒、商品の落下、ガラスの破片に注意を。衣類や手荷物で頭を守る。
- 店員の指示に従って落ち着いて行動する。



エレベーターの中

- 地震時管制運転装置がついているエレベーターは、自動的に最寄りの階に停止するので、停止した階で降りる。装置がついていなければ、すべての階のボタンを押し、停止した階で外に出る。
- 閉じ込められたとき、非常ボタンやインターホンで連絡をとり、救出を待つ。



劇場・ホール

- 座席の間にうずくまり、カバンや衣類で落下物から頭を守る。
- 頭上に大きい照明などがある場合には、その場から離れる。
- 係員の指示に従い、冷静な行動を。



集合住宅

- ドアや窓を開けて逃げ道を確保する。
- 避難にエレベーターは絶対使わないこと。





屋外にいたら

●路 上

- ブロック塀や自動販売機などから離れる。
- 倒れそうな電柱や垂れ下がった電線に注意する。
- 繁華街などでは落下物に注意する。
- 頭をカバンなどで保護して、空き地や近くの公園などに避難する。



●海岸付近

- 高台へ避難し津波情報をよく聞く。
- 注意報・警報が解除されるまでは海岸に近づかない。



●電車などの車内

- 将棋倒しや網棚からの落下物に注意し、つり革や手すりにしっかりとつかまる。
- 座っているときは、足をふんばって上体を前かがみに。雑誌やカバンなどで頭を保護する。
- 勝手に降車せず、乗務員の指示に従って落ち着いた行動を。



●車を運転中

- 徐々にスピードを落とし、道路の左側に停車する。
- 揺れがおさまるまで車外には出ず、カーラジオなどで情報を収集する。
- 避難が必要なときは、キーはつけたまま、ドアロックもしない。車検証などの貴重品を忘れずに持ち出し、徒歩で避難を。



学校・勤務先では

●学校にいるとき

- 先生や校内放送の指示に従う。教室にいるときは、すぐ机の下にもぐり、机の脚をしっかりと持つ。
- 本棚や窓から離れ、安全な場所に移動する。



●職場にいるとき

- 窓際やロッカー、資料棚などから離れて、机の下などに入り身を守る。
- 揺れがおさまったらガス湯沸かし器などのスイッチを切るなど、確認する。



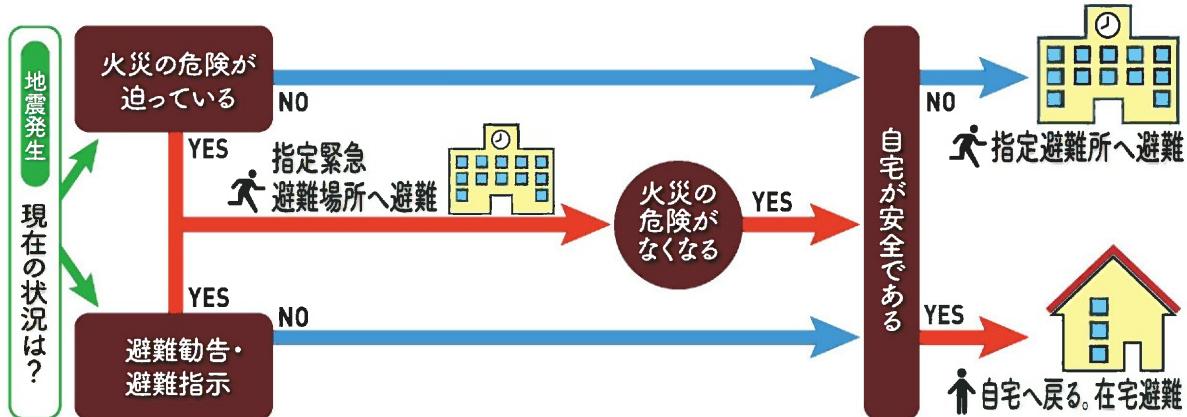


避難に関する情報



避難の流れ

地震災害が発生すると「緊急地震速報」など瑞穂市から災害に関する情報が放送されます。街のスピーカー(防災行政無線)、ラジオ、テレビなどから放送される災害情報を収集しましょう。



自宅で被災したら

避難するときの判断基準は次の4つ

避難勧告などの避難情報が出た

火災やガス漏れ、家屋倒壊の危険性がある

ライフラインが止まり、備蓄品がなくて生活できない

自宅に留まるのが不安



優先すべきは、命と心です

地震後、揺れがおさまってきたら、まずは自宅を出て、避難すべきか冷静に判断します。
どこへ避難するかなど、日頃から家族と話し合っておきましょう。

避難所生活になったら

大地震の経験は、それだけで大きな不安やストレスの原因になります。慣れない集団生活を強いられる避難所の場合、さらに肉体的・精神的トラブルも起こりがち。共助の精神が乗り越える力になります。

自主防災組織や避難者が
中心に運営

ルールを
守りましょう

助け合って、要配慮者
(高齢者・妊婦など)に心遣いを



外出先で被災したら

帰宅せず、その場に留まる判断基準は次の5つ

自宅まで距離が遠く(10km以上)、徒歩による帰宅が困難



そこに留まる勇気も大切です

移動中に水や食料を手に入れるあてがない



歩きにくい靴を履いている



防寒・雨具の備えがない(雨・雪の場合)



心臓病・高血圧などの持病がある



帰宅する場合、帰路の安全性が最重要です。外出中大きな揺れに襲われると、公共交通機関がストップし、自家用車の通行も制限されるため、帰宅が困難になります。移動手段は原則、徒歩か自転車のみ。二次災害や転倒事故の危険性を考えれば、安全が確保されるまでは極力「その場に留まる」ことが重要です。

帰宅困難者になったら

落ち着いて、まずは状況確認

携帯ラジオは必需品

災害用伝言ダイヤル(171)で安否確認

声をかけあい、助け合おう

帰宅困難時に備えて

自宅までの道順を知っておく

事前に家族で話し合い(連絡手段、避難ルート)

作っておくべし! 帰宅地図

職場・学校などにスニーカーを置いておく

職場・学校などに非常食を備蓄しておく

冷暖の装備(タオルやカイロ)も準備しておく

避難するときの服装

頭部をヘルメットや防災頭巾で保護

手には何も持たない

長ズボン

上着は長そで



丈夫な靴

地震後は、床や地面に様々なものが散乱しています。

また、余震も続くことから、いつ頭上面に物が落ちてくるかもわかりません。頭と足に怪我を負うと避難などの行動に大きな負担となります。頭と足の安全を確保しながら避難してください。

夜間の避難では懐中電灯が必要ですし、服装も気温の変化に応じて調節できるようにしておくといいでしよう。

帰宅が難しくなったら

岐阜県では、遠距離を歩いて帰宅する人をサポートするために、コンビニエンスストアやさまざまな商業施設と「徒歩帰宅者の支援ステーションに関する協定」を締結しています。水やトイレ、道路情報などに困ったら、支援ステーションステッカーが貼られている店舗を利用しましょう。





地震対策 (屋内・屋外)

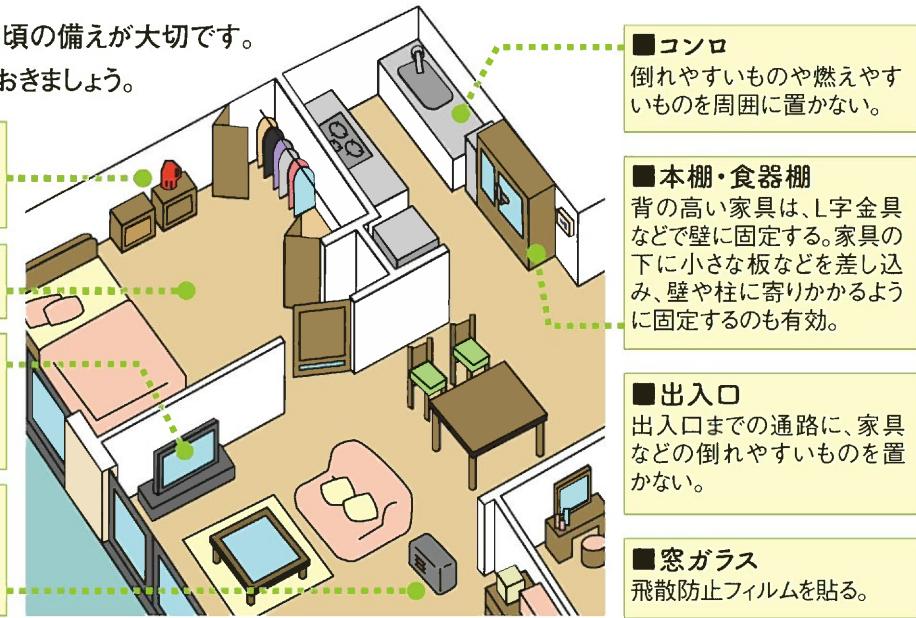


家の中の安全対策

突然やってくる地震には、日頃の備えが大切です。

家の中や周囲の確認をしておきましょう。

- 懐中電灯を設置
所定の位置に懐中電灯を設置しておく。
- 寝室
背の高い家具などは置かない。
- テレビ等の転倒・落下防止
高いところには置かないように、しっかりと固定するか、免震シートを貼る。
- ストーブ
自動消火機能付きのものにし、カーテンなど燃えやすいものは周囲に置かない。



- コンロ
倒れやすいものや燃えやすいものを周囲に置かない。

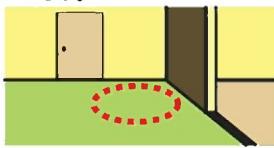
- 本棚・食器棚
背の高い家具は、L字金具などで壁に固定する。家具の下に小さな板などを差し込み、壁や柱に寄りかかるように固定するのも有効。

- 出入口
出入口までの通路に、家具などの倒れやすいものを置かない。

- 窓ガラス
飛散防止フィルムを貼る。

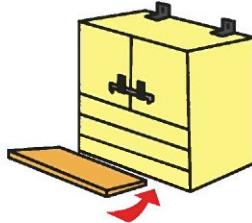
家の中に 逃げ場としての 安全な空間をつくる

部屋がいくつもある場合は、人の出入りが少ない部屋に家具をまとめて置きましょう。無理な場合は、少しでも安全なスペースができるよう配置換えしましょう。



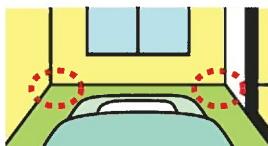
家具は倒れにくい ように配置する

家具と壁や柱の間に遊びがあると倒れやすい状態となります。家具の下に小さな板などを差し込んで、壁や柱によりかかるように固定しましょう。



寝室、子どもや お年寄りのいる部屋 には家具を置かない

就寝中に地震が発生する危険です。子どもやお年寄りなどは逃げ遅れる可能性があります。



安全に避難できるよう に、出入り口や通路に は物を置かない

玄関などの出入口までの通路に、家具など倒れやすい物を置く事を控えましょう。玄関にいろいろと物を置くと、出入口をふさいでしまうこともあります。

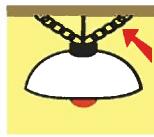


地震対策でもっと身近にできることが、家具類の転倒防止です。家族で知恵を出し合って安全・安心な暮らしを確保しましょう。

家具の転倒・落下を防ぐポイント

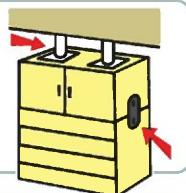
照明器具

チェーンと金具を使って数箇所止める。蛍光灯は蛍光管の両端を耐熱テープで止めておく。



タンス・本棚

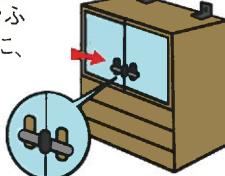
L字金具や支え棒などで固定する。二段重ねの場合はつなぎ目を金具でしっかりと連結しておく。



食器棚

L字金具などで固定し、棚板には滑りにくい材質のシートやふきんなどを敷く。重い食器は下に、軽い食器を上に置く。

扉が開かないように止め金具をつける。





屋外の安全対策

屋外の安全対策もとても重要です。普段から事前に対策を行い、地震に備えましょう。

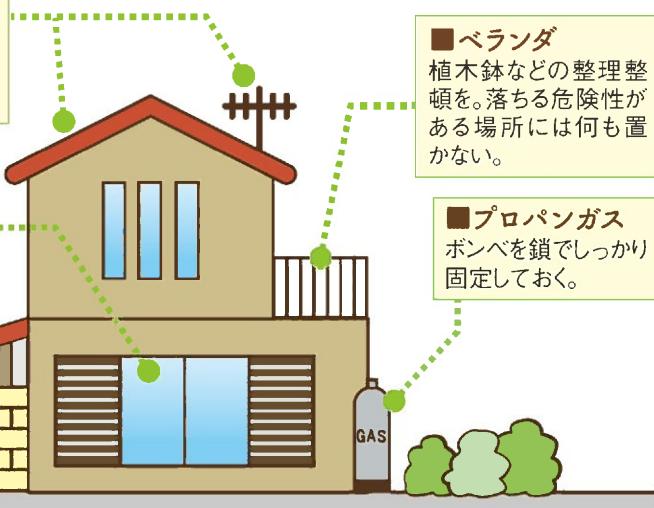
■屋根
不安定な屋根のアンテナや、屋根瓦は補強しておく。

■窓ガラス
飛散防止フィルムを貼る。

■

ブロック塀・門柱

土中にしっかりと基礎がないもの、鉄筋が入っていないものは危険なので補強する。ひび割れや鉄筋のサビも修理する。

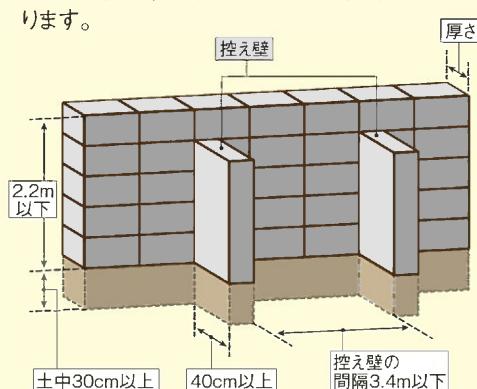


■ベランダ
植木鉢などの整理整顿を。落ちる危険性がある場所には何も置かない。

■プロパンガス
ボンベを鎖でしっかりと固定しておく。

ブロック塀の基準値チェック

ブロック塀は、建築基準法施行令でつくり方の基準が定められています。自宅のブロック塀が下記の基準に適合しているかチェックしましょう。一つでも適合していない項目があれば、専門家に相談し改善を行う必要があります。



1 高さは2.2m以下になっているか。

2 ひび割れ、傾きなどはないか、鉄筋がさびていないか。

3 支えとなる控え壁は、3.4m以下の間隔で設けてあるか。長さは40cm以上あるか。

4 ブロックの厚さは10cm以上(塀の高さが2.0mを超える場合は15cm以上)あるか。

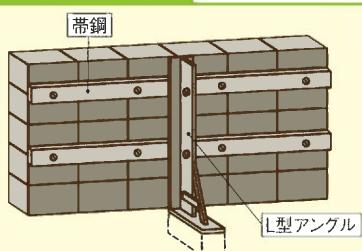


安全なブロック塀の目安

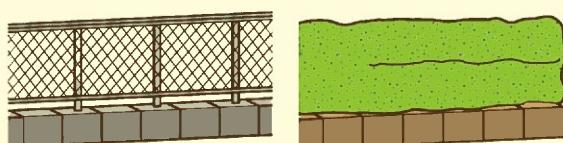
- 鉄筋はきちんと入っているか
- 基礎はしっかりとされているか
- 控え壁は設置されているか
- すかしブロックや面取りブロックなど化粧ブロックはできるだけ使用しない
- 傾きやひび割れ、破損箇所はないか
- よう壁や石積みの上に設置していないか
- 盛り土や土止めになっていないか
- 新たに作るときは、安全な生垣やネットフェンスにしましょう

ブロック塀の補修ポイント

既存のブロック塀を補強する際は、帯鋼を取り付けて鋼柱を立て、柱にはL型アングルを使用するなどの補強をしましょう。



新たに塀を作る場合は、より安全な生け垣やネットフェンスにしましょう。





集合住宅の安全対策

マンションなどの集合住宅では、多くの人たちが暮らしています。そのため、日頃からの防災対策が求められています。いざというときに備えて点検しましょう。

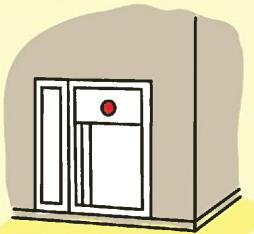
■ベランダの避難ハッチ（非常脱出口）

日頃から使用方法をよく確認しておく。避難器具の周りに物を置くのは厳禁。また、落下する危険のある物は置かないように。



■防災施設・防火設備

通路など共用部分に置いてある消火器や火災報知器などの消防設備の場所を日頃からよく確認しておく。



■通路

いざというとき安全に避難できるように、通路には、通行の妨げとなる自転車などの物を置かない。また、類焼防止のために、古新聞や布切れなど、燃えやすい物を置かないように。



■非常階段

物を置くのは厳禁。特に非常扉の前は要注意。



■玄関

玄関は、脱出口、避難経路として重要。ふさがっていては逃げ出しきることもできない。開かなくなってしまった扉をこじ開けるためにバールなどの用意を。



■管理組合からの連絡に注意

防災設備の点検や防災訓練のお知らせなど、管理組合からの連絡には日頃から注意しておく。





火災を予防する

地震で怖いのが二次災害としての火災です。阪神・淡路大震災では大規模な市街地火災が発生しました。津波に起因する「津波火災」が沿岸部で目立った東日本大震災でも、地震の揺れに起因する「地震火災」が発生しました。大規模に燃え広がる恐れのある地震火災を防ぐためには、まず各家庭から火災を出さないことが重要です。万一出火しても、初期段階で消し止めて延焼を防がなければなりません。

もし出火したら

1 大声で知らせる！

- 大きな声で「火事だー！」と叫び、隣近所に知らせる。声が出ない場合は、非常ベルを鳴らすか、やかんや鍋など音の出るものを持たくななどして異常を知らせる。
- どんなに小さな火事でも必ず119番に通報する。



2 初期消火

- 火がまだ横に広がっているうちに消火が可能。
- 消火器や水だけでなく、座布団や毛布など手近なものを利用する。



3 早く逃げる！

- 天井まで火が燃え広がったら消火は困難。無理せず早めに避難する。
- 可能ならば、燃えている部屋の窓やドアを閉め、空気を遮断してから避難する。



地震時の初期消火のタイミング

大きな地震が発生したら、自分の身を守ることが最優先です。

やけど等の危険を回避するためにも無理に火を消すことはやめましょう。ただし、揺れが収まつたら直ちに火を消して、ガスの元栓を閉めましょう。

初期消火が可能とされているのは、天井に火がまわるまでです。天井まで火がまわってしまったら、素人では消火しきれません。すぐに煙を吸わないよう注意しながら避難し、消防活動は現場に到着する消防隊に任せましょう。



通電火災を防ぐ

地震時の火災で注意したいのが「通電火災」です。これは停電した電気が復旧する際に起こる火災です。倒れた電気器具に通電して周囲のものに火が付いたり、ガスが漏れている場所で電気器具に通電して発火したりします。通電火災を防止するためには次のことを心掛けましょう。

- 大きな揺れの後は、念のため使用中の電気機器類のスイッチを切る。
- 避難をする時には、コンセントを抜き、ブレーカーを切る。
- 地震後に機器を使用する際には、ガス漏れや配線器具の損傷の有無などの安全確認をしてから。



地震



地震時の火災（消火方法）



火元別の消火方法

コンロ

- 油鍋に水をかけるのは厳禁。
- 消火器は離れた位置から、鍋の全面を覆うように噴射する。
- 消火器がない場合は、シーツやバスタオルを濡らして手前からかぶせ、空気を遮断する。



ストーブ

- 消火器は直接火元に向けて噴射する。
- 消火器がない場合は、シーツや毛布などを濡らして手前からすべらせるようにかぶせ、空気を遮断する。



カーテン・ふすま・障子

- カーテンは燃え広がる前に水をかける。できればレールから引きちぎり消火する。
- ふすまや障子などは蹴り倒して、踏み消す。その後、水をかけてしっかりと消火する。



たばこ

- 寝たばこなどにより、布団などの綿製品が焦げた場合は、消したつもりでも見えないところに火種が残り、再び燃え出しがあるので、浴槽などにつけ完全に消す。



衣類

- 着衣に火が付いたら、転げまわって火を消す。風呂場に残り湯があれば浴槽に飛び込む。



電気器具

- いきなり水をかけると感電の危険がある。コンセントを抜くかブレーカーを切り、消火器で消火する。



たき火

- 消火器を使う。消火器がない場合は水や土で消す。
- 水の準備ができていない場合は、ほうきや木の枝でたたいて消し、その後、水でしっかり消火する。



逃げるタイミングは天井への延焼！

避難する目安は、天井に火がまわったとき。火が天井に燃え移るまでの間は初期消火に努めますが、もし炎が天井に燃え移ったら、決して自分で消火しようとせず、迷わずすぐに避難してください。



本当に恐ろしいのは煙です

火災で発生する煙には、一酸化炭素などの有毒ガスが含まれています。吸い込むと中毒などにより命を落とす危険性があるので、次のポイントに気を付けながら避難しましょう。



- 濡らしたタオルやハンカチなどで、口と鼻を覆う（無理な場合は、ネクタイや衣類で代用する）。
- 短い距離なら息を止め、一気に走り抜ける。
- できるだけ姿勢を低くする。
- 視界が悪いときは壁伝いに避難する。



地震時の火災（消火器の使い方）



消火器の使い方を覚えておきましょう

消火器の種類

消火器には、どんな種類の火事に適しているかを示すラベルが表示されています。火災種別に合った消火器を選びましょう。一般的な家庭の場合は、万能タイプの粉末消火器か強化液消火器が便利です。

火災の種類・ラベルの色	普通火災	油火災	電気火災
消火器の種類	木材・紙など一般可燃物による火災	灯油・ガソリンなどが燃える火災	電気設備など感電の恐れがある火災
粉末消火器	白 ○	○	○
強化液消火器	○	○	○
泡消火器	○	○	×



構え方

- 火の風上に回り、風上から構える。
- やや腰をおとして低く構える。
- 熱や煙を避け、炎には真正面から向き合わない。
- 炎を狙うのではなく、火の根元を掃くように左右にふる。

点検のポイント

安全ピン

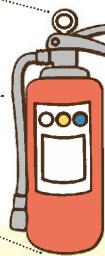
- ▶変形、損傷はないか
- ▶封印は切れていないか

ホース

- ▶ひび割れ、劣化、ゆるみはないか

本体・底部

- ▶サビや変形はないか



レバー

- ▶変形、損傷はないか

キャップ

- ▶変形やゆるみはないか

ゲージがある場合

- ▶圧力を示す針が規定値内にあるか



住宅用防火機器を活用しましょう

火災の発生を早く知る

住宅用火災警報器

煙や熱を感じると、警報音で知らせてくれます。平成16年の消防法改正により、設置が義務づけられました。



火災防止に

安全装置付調理器具

異常な過熱や火が消えた際に、自動的にガスの供給を止めます。



火災の被害を最小限に

防炎品

火がついても燃え広がりにくい防炎品。カーテンやカーペット、寝具、エプロンなど。



住宅用消火器

小型で軽量タイプの消火器です。

簡易自動消火装置

火災の熱を感じると、自動的に薬剤を放出します。

住宅用スプリンクラー設備

火災の熱を感じると、部屋全体に放水します。